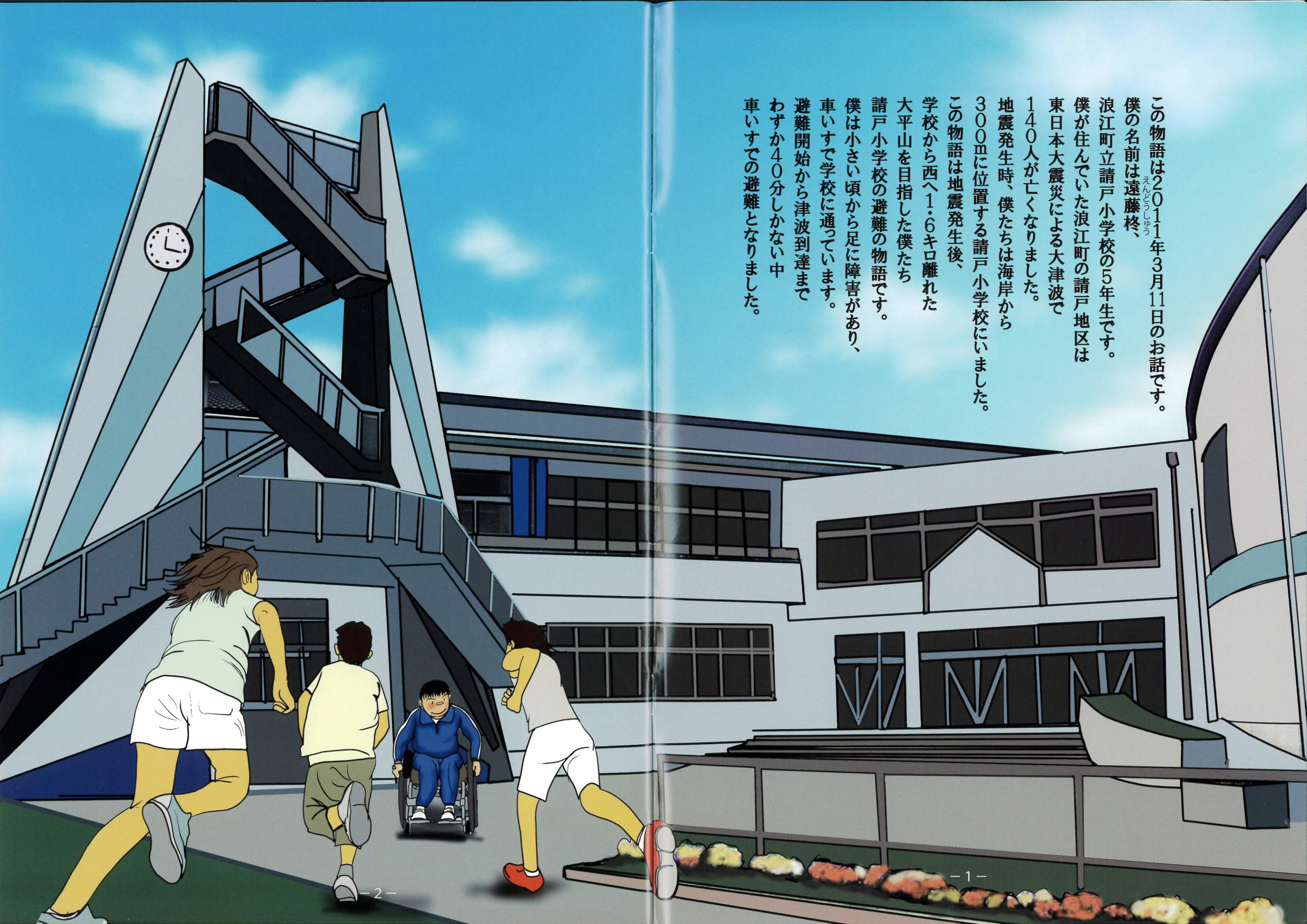
浪江 請戸小学校物語

奇跡の避難

制作／浪江まち物語つたえ隊
文・絵／いくまさ鉄平



この物語は2011年3月11日のお話です。
僕の名前は遠藤柊（えんどうしゅう）、
浪江町立請戸小学校の5年生です。
僕が住んでいた浪江町の請戸地区は
東日本大震災による大津波で
140人が亡くなりました。
地震発生時、僕たちは海岸から
300mに位置する請戸小学校にいました。
この物語は地震発生後、
学校から西へ1・6キロ離れた
大平山を目指した僕たち
請戸小学校の避難の物語です。
僕は小さい頃から足に障害があり、
車いすで学校に通っています。
避難開始から津波到達まで
わずか40分しかない中
車いすでの避難となりました。

「これから帰りの会を始めます。」
「では係り、委員会から連絡はありませんか？」

一足早く帰宅した1年生を除き
学校には83人の生徒がいました。
2年生3年生は、帰りの時間で教室で
「帰りの会」を行っていました。
4年生は体育館で卒業式の準備に
参加する為、教室から移動中、
僕たち5年生は卒業式の準備で、
体育館にいました。
6年生は教室で帰宅の準備をしていました。

その時です。
3月11日 午後2時46分
東日本大地震が発生したのです。

ゴゴゴゴゴー

「キャー」
「地震だ、先生、こわいよ」
「大きな地震だ、机の下に入れ。」
「先生、こわいよ、こわいよ」
「地震はもう少しでおさまるから、そのまま、大丈夫だ。」

「さー、とまったようだぞ、校庭に行くぞー」
「柊くんはどうするの」
「川浜先生、柊くんをお願いします。」
「わかりました。柊くん行くわよ」
「はっ、はい」

外へ出ようとしたとき、
正面玄関前には驚く景色が広がっていました。

「先生、見っ見てえ！あっあれ」
「道路が川になっている」
「プール、プールみて。
プールが海みたいに波打ってるよ。」
「プールの水があふれているんだ。」
「こっちはダメ。保健室を通ってベランダにまわれ」
「先生、4年生も二階からおりてくるよ。」
「おーい。4年生。昇降口はだめだ。
保健室を通って校庭に出なさい。
昇降口はつかわないで。」
「おーい。二階の皆、階段に回って、
こっちから出るのよ。」
「先生、靴、靴は」
「そのままでいいから、上履きのままでいいから」

その時、パトカーが回ってきて、
津波の到来を知らせました。
「何言っているんだあ？」
「津波が来るよとか、言ってなかった？」
「つっ津波、早く逃げないと!!」
「ええ？」

「皆さん、大津波がくるそうです。
早く、校庭に子供たちを集合させてください。
皆で大平山に避難します。担任の先生は、
まずクラスの人数を確認してください。」
「はい。さあ皆、各クラスごとにならんで、
並んだら番号だ。」
「そろいましたか。そろったら避難してください。
私は役場に連絡して向かいます」
「わかりました。さあ行きますよ。」
「柊くん、行くわよ。大丈夫？」
「先生、大丈夫だよ。」
僕は皆に遅れないよう懸命に車いすを漕ぎました。
学校の北側は農道だったけど
浜街道を横断するまでは舗装されており
ついていくことができました。
だけど500mぐらいいったときです。
道路は砂利道に代わります。
すごい抵抗で全然前に進みません。

悪戦苦闘をしていたのは
僕だけではありません。
小学校低学年の子供たちにとっても
1・6㎞という距離はとてつもなく遠いものでした。
「裕子ちゃん、がんばれよ。
もう少しだからな。」
「お兄ちゃん、苦しいよ。
もう走れない。
母さん迎えにきてくれないかなあ。」

「きっと大平山に来てくれる。。
だから涙を拭いて、もう少しがんばろな」
「やだ。もう走れない。ここでママを待つ、
ママ来てくれるからママを待つ。」
「何言ってんだ。
ここにいたら死んでしまうぞ。
ママに会いたかったら走るんだ。」

高台の避難場所までは遠く
砂利道を1㎞以上走り、
やっと高台に通じる山道に入りました。
そこからは道が狭くなります。
車いすは通れません。
「柊は、おらにおぶされ」
「せっ、先生」
僕は必至で担任の新井先生の
背中にしがみつきました。
「いいかしっかりつかまれよ。
みんなは柊の車いすを頼むぞ」

時間にして1時間が経とうとしていました。その時です。

「つっ・津波」
「たっ田んぼが海のようになっているぞ。」
「子供たちは見ないで。
とにかく前だけを向いて走って！
先生、子ども達に津波を
見せないように行ってください。
トラウマになります」
「先生、どこまでいくの」
「6号線に出たとこに広場があるだろ。
そこまでいけば何とかなるだろう。」
「広場って六角茶屋のあるところ？」
「そうだあ。」

バキバキバキ、ゴゴゴー

励ましながら山道をひたすら歩いて
国道6号線にでました。
「ついたの？
六角茶屋のある広場ってここ？」
「そうだあ。ここまでくれば
津波大丈夫だろ。
柊はここで休んでいてくれ。」
「おーい！みんなあ！
ちょっとここで一休みするぞ。」
「わたしは役場に行って
様子をきいてくる。
校長先生も役場にいると思うから、
救助に来てもらうよう頼んでみる。」
「先生、大丈夫ですか、
ここからだと2㎞はあるんでしょ。」
「大丈夫です。足には自信がありますから」

そういって古巻先生は役場に向け
走り出した直ぐのことでした。
入れ替わるように一台の
大型トラックが
僕たちの前に止まりました。
「おーい、何してんだ。早く逃げろ。
津波は何度もくるぞ。
乗れるだけ乗れ、のってけ」
「あなたは・・?」
「いわきのもんだ。グダグダ言ってねえで
乗れるだけ乗るんだ。
次の津波、そこまできってっどお」
「わかりました。皆!
この車で連れて行ってもらうから、
小さい子から乗り込め」

僕たちは大型トラックに乗せてもらい
役場まで連れて行ってもらいました。
荷台は子供たちで一杯で、
身動きできないぐらい
ぎゅうぎゅうでした。
後で聞いたのですが
100名近く乗っていたそうです。
役場にトラックが到着したのは、
児童を迎えるためのバスが
役場を出発しようとしている時でした。
「どうやってここまで・・・」
「親切なトラックの運転手さんが
皆を乗せてくれたんです。」
「そっそうですか、何しろ良かった。
今日はとりあえず、
ここが避難所になります。
子供たちを降ろしましょう。」
僕たちは町の体育館に
連れて行ってもらい、
そこで一夜を迎えました。

一人の犠牲も出さなかった請戸小学校。
そこには学校の先生の素早い決断と日ごろの訓練
地域の人との連携がありました。
その後、翌日の3月12日
夕方6時に福島第一原発事故に伴い、
10㎞圏外に避難命令が出ました。
それが切っ掛けとなり
大混乱の中、請戸小学校の教職員14名と
児童92名は県内外に散り散りとなり避難しました。
保護者が迎えに来なかった友達は先生たちに
つれられ津島方面にバスで避難をしたそうです。

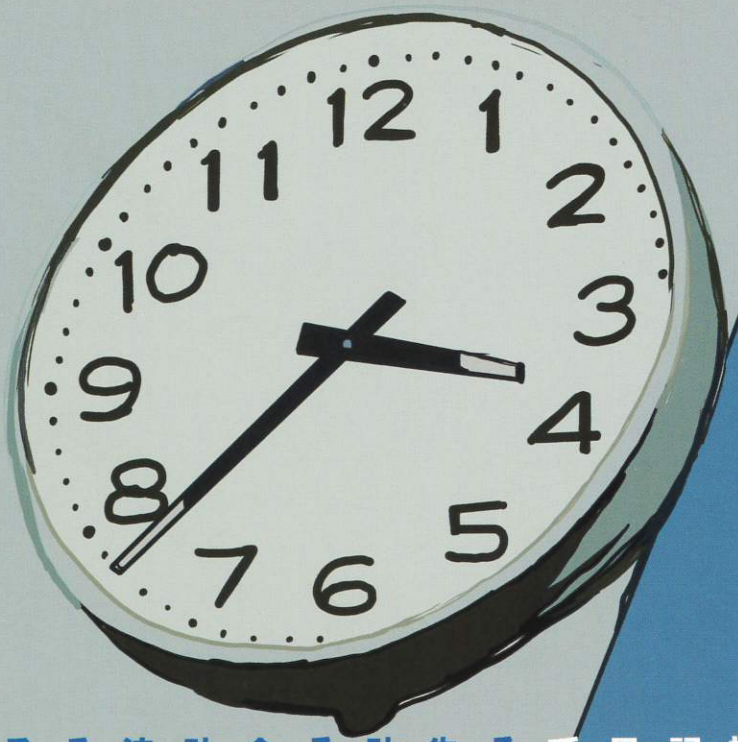
全員の安否の確認が出来たのは
桜もちった4月の終わりでした。
3月11日請戸地区では多くの人が
津波にのまれお亡くなりになりました。
原発事故のために中々、見つけてもらえなかったそうです。
僕は津波で亡くなった町の人のことを忘れません。
僕を逃がそうと一生懸命、
助けてくれた仲間たちのこと忘れません。
そして僕を背負い、一生懸命走ってくれた
先生の背中の温もりを忘れません。

地震発生から避難まで

14;46　地震発生
14:47　安全確保のため待機支持（校内放送）
14;51　大津波警報発令確認
14:52　児童の安全確認と避難指示（校内放送）
14;54　教務主任先導で大平山に向けて避難開始
14;55　校長・教頭、保護者対応→児童との合流は大平山
15:15　校長、保護者の来訪が止まり大平山に向けて避難
15:17　町教育委員会担当者来校し、避難指示
15:35　教頭、校舎最終確認後大平山に向けて避難
15:37　大津波来襲（体育館時計）高さ15.5m（体育館痕跡）
16;05　児童・教諭大平山を西に縦走、国道6号線を目指す
16:30　国道6号線の鴻草地区到着
16:40　運送業者大型トラックでサンシャイン浪江へ

請戸小学校　沿革

明治6年6月	請戸字本町浜谷善一氏宅に広業少学創立
7年9月	請戸小学校と改称
20年4月	請戸尋常小学校と改称
昭和22年4月	請戸村立請戸小学校と改称
23年6月	県指定により学校給食
35年11月	校章制定（本校図工主任松本亨教諭による）
37年9月	校歌制定　冬村春踏（請戸出身）作詞
平成10年3月	新校舎竣工・開校式
平成23年3月	東日本大震災発災、東京電力福島第一原子力発電所事故



挨拶

2011年3月11日。岩手・宮城・福島県沖を
震源とする東日本大震災が発生、
大津波により請戸小学校も壊滅的な
被害を受け、子供たちの大切な
記録や資料も全て失いました。
日ごろから地震・津波に備え
ていた校長の適切な判断
それを受け迅速に対応した教職員
先生の指示に従い
助け合いながら頑張った児童、
そして、そこに地域が連携したことで
全員の命を守ることができました。
助け合うことで命の尊さを知った子供たち
津波を見せぬようにした教師の配慮
そうしたことを後世に伝えたく
この物語を作りました。
東日本大震災の遺構建物として保存の決まった
請戸小学校とともに震災の記憶を
末永く繋いでいくことを願っています。

浪江まち物語つたえ隊　代表　小澤　是寛

制作：浪江まち物語つたえ隊

この絵本は福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金を受けて制作しました。